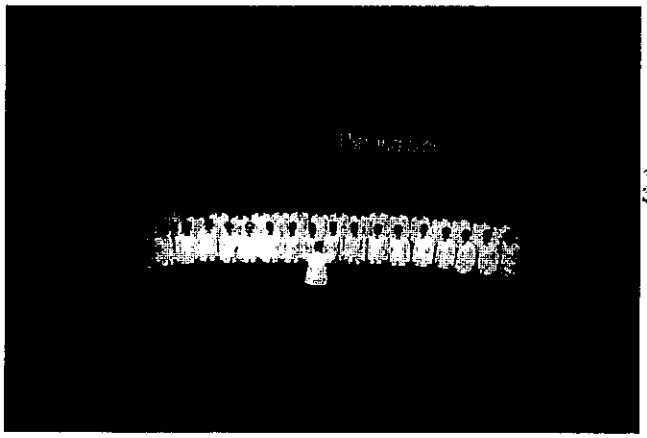
岡山大学男声合唱団 コール・ロータス創世期の頃など

大洲中央病院
昭41　武　内　成　禮

昭和三十四年（1959年）の春、私は岡山大学医学進学課程に入学しました。岡山操山高校で三年間合唱経験のあった私は、岡大グリークラブに入部間もない一年生の後期、グリークラブの男声合唱の指揮者を、引き続き教養課程二年生のときに混声合唱指揮者を仰せ付かりました。そうした経緯で、お前が医学部専門課程の方に来たら、今度は医学部の方で、合唱好きな数人の医学生が集まってやってきた男声合唱を更に発展させて、しっかりとした男声合唱団にしてくれ、との先輩の方々から熱い要望があり、昭和三十六年の春、私が医学部進学課程から医学部専門課程への進級に落第するのを待つようにして、今までの男声合唱団は発展的解消という事で、新しくコール・ロータスが岡大医学部に誕生しました。医学進学過程の二年間、合唱とアルバイトばかりやっていた付けが回り、教養課程一年時の前期に落としたドイツ語一単位が取り戻せず、学内浪人と言う事になってしまいました。そういった訳で時間の有り余る一年間に私は恵まれ、暇なことをこれ幸いと、部員が使う楽譜の調達、つまりガリ切り及び印刷（当時は今みたいに便利なコピーなど無かった。全部手書きのガリ版刷りだった。）大阪、京都に出かけ男声合唱の楽譜を探し、また編曲など殆ど一人でこなし、コール・ロータス最初の一年に心置きなく没頭する事が出来ました。来るものは拒まず。男ならどなたでもOK。合唱団の最高齢は32歳のドクターでした。殆どの部員が私より大先輩達々。若造の私が偉そうに大声を張り上げながらの練習。皆さん何一つ不服を言われず一番若輩のわたしに、ただ、にこやかに完全服従で練習に耐えて下さいました。思えば先輩諸氏は本当に心の大きな方々ばかりでした。そして、その秋には部員も三十名を越え、形だけは合唱団の体裁が整いました。翌年の1962年の一月、第二土曜日、第一回の定期演奏会開催。演奏会と言っても、それは、ただただ男の雄叫びを張りあげると言った表現が相応しいものでしたが、心からの歌を「叫び」ました。男声合唱なんてどう歌ったらいいものやら、身近に適当な模範とすべき団体もなく大声で蛮声を張り上げるだけの代物でした。でも、やる気、歌う気だけはどこにも負けませんでした。発声の先生と言えば、当時度々来日したイタリア歌劇のデル・モナコであり、またタリアビーニやステファーノ、プロッティーやベルゴンツィでした。みんなオペラ歌手よろしく大声で発声練習したものです。部の顧問は第一外科助教授の田中早苗先生（故人）でした。忘れもしません。演奏会が終わった後の打ち上げの会で、第一外科教授の陣内伝之助先生（故人）は、我々の演奏に大いに感激され、この演奏会はご自分が岡山に来られて、いちばん感動的な出来事だったとおっしゃいました。そして教

結成後初合唱祭　岡山公会堂　1962？春

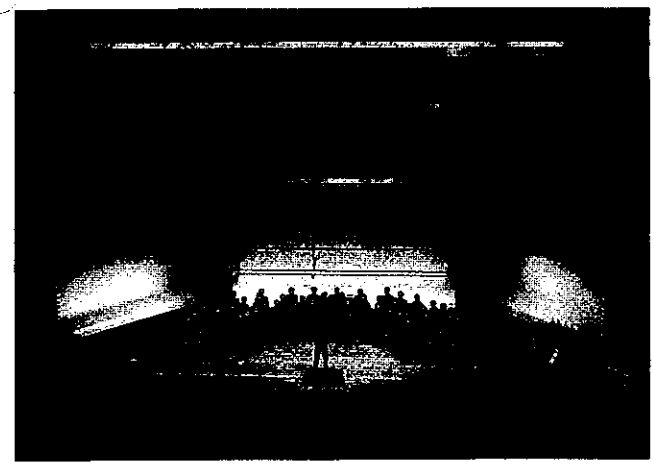
医学部内第1講義室にて練習　1961～62年



ロータス第1回定期演奏会　S37（1962）年1月

授であるご自分をさておき助教授の田中早苗先生が顧問である事は、これは全くけしからん事であるとも言われ、羨ましくて仕方無いと言った風なご様子でした。そして、これは今晩の感激料だと、懐から大枚二十万円をポンと部にくださいました。当時の二十万円は大した値打ちで、貧乏な部は何時も金がなく、部費を稼ぐのに大の男達が全員で、例えば或る洋裁学校のファッション・ショーのアトラクションに30分出演、一万円から一万五千円くらい頂くのが相場でして、この二十万円が如何に私たちにとって大きいものであったかご想像ください。

次の年、山口県を除く中国地方（山口県は既に西部で既存の九州ブロックに加盟済み）の、ありとあらゆる大学、専門学校に合唱団を作ってらもうよう手分けして頼み歩き、連盟に加盟してもらい、遮二無二、中国ブロックをでっちあげ、我がロータスは医学部の男なら誰でも可と50人をかき集め（中には先天性音痴？も居たよ。）広島で中国ブロックのコンクールを行い、その大学の部で優勝し、晴れて中国ブロック代表となり上野の文化会館での全日本コンクールに出場。ここまでは全て順調で良かったのだが、さて課題曲演奏のしょっぱな、ユニゾンの出だし、ピアニッシモから声を限りのクレッセンド。五階席まである巨大な円筒状の残響がよく残る上野の文化会館、こんな良いホールで、未だかつて歌った経験のない我ら50人、第一声を根限りのフォルテッシモで音を伸ばしその後、フォルテのまま音を切る箇所があったのだが、音を切った後、思っても見なかった大反響音が、自分達が歌っているステージに「ウォーン！」と帰ってきた。自分達が発しておきながら、その凄まじく大きな、素晴らしい残響音に腰が抜けるほどぶったまげ、興奮し、途端に頭の中は「ポワーッ」と空っぽになり、あとは二の句が継げず、みな膝がガクガク、揚げ句に声が上擦るわ引きつるわ！。普通でも高音の出にくいテノールの声は、かすれ、何とも情けない悲鳴と化し、一体これは何だ！これでも合唱かと大方の審査員達に叩かれ屈辱の最下位であった。（プロの指揮者で審査員の福永陽一郎氏だけは、この、がむしゃらな演奏を新鮮で魅力的と言ってくれた。）



東京文化会館にて全日本合唱コンクール中国ブロック代表
９位（最下位）
岡大医学部男声合唱団コール・ロータスＳ37（1962）年11月23日

医学部全体の学生数、そのころ500人。団員確保に対象学生の少なさは如何ともし難く、何かと無理があり、これでは将来この部は、じり貧になること間違い無しと判断してコール・ロータス結成３年目の秋、大学祭にて全岡大のサークルへと変身を宣言。全学部生に入部を呼び掛けたところ「ワーッ！」と集まって来た者を併せて、一挙に部員数100人の大部隊に、嬉しくて目眩がしそうになる。さすが全学部のサークルと喜んだのも束の間、二か月後の新春の第３回定期演奏会を待たずして秋に新しく加わった部員がバラバラ、バラバラと減り、元から居た医学部の学生まで数人が抜け、結局は殆どが元の医学部の部員と僅か数人の新しい他学部の学生による50人足らずの演奏会となってしまいました。結果としては僅か五人にも満たない程の新しい血の入れ替わりであったが、それが岡大男声合唱団・新生ロータスの出発でした。あの時の執行部による大英断があったからこそ、あの永く続いた学園紛争の厳しい洗礼を浴び、他のサークル同様壊滅的打撃を受けながらもロータスは生き延びる事が出来ました。今では医学部の学生は殆ど居なくなりましたが、ロータスを全学部の学生に解放したあの時の選択は正しかったと思うのです。

43年前20歳だった私も今年で63歳を迎えます。信じ難い現実です。若き或る日、自分達が歌った音の渦の中、感激に身震いし、それが忘れられなくて何十年も男声合唱を、やって来た私です。５年毎の記念演奏会にはOBステージを何時も指揮させて頂き、もう殆ど孫に近い後輩達と一緒に歌ったりもします。再来年は45周年の記念演奏会となります。コール・ロータスは私の青春でありました。でもこの調子では私の生涯となるでしょう。